

# 丹波新地域ビジョン

—素案(未定稿)—

令和3年10月

丹波地域ビジョン委員会

兵庫県丹波県民局



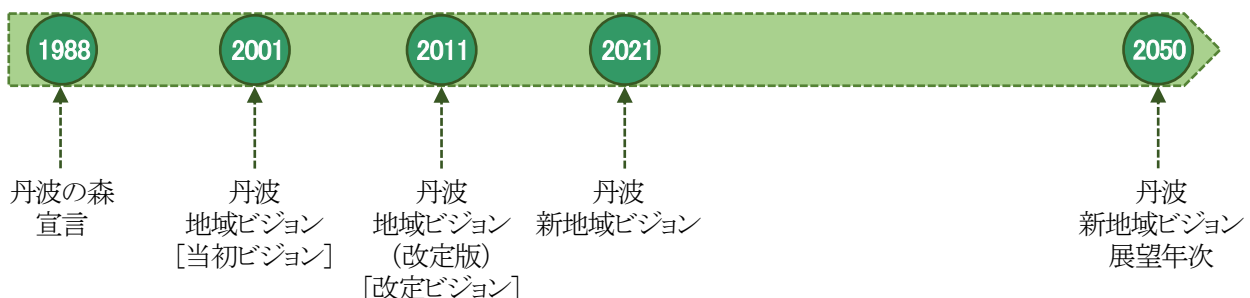
# 目 次

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| I はじめに                      | 2  |
| 1. 新ビジョンの役割・性格              | 2  |
| 2. 新ビジョンの構成                 | 3  |
| II わたしたちの丹波ー風土・文化、ポテンシャル    | 4  |
| III 丹波の森づくりのこれまでとこれからー継承と発展 | 6  |
| 1. 丹波の森づくりの理念、成果            | 6  |
| 2. 地域ビジョンの評価検証              | 9  |
| 3. これからの森づくりに向けて            | 14 |
| IV 2050年に向けた長期変化ーリスクと可能性    | 15 |
| 1. 長期的な人口減少・高齢化             | 15 |
| 2. 環境制約・資源制約の深刻化            | 16 |
| 3. 超スマート社会の到来               | 17 |
| V 2050年の丹波を描くー望ましい地域の姿      | 20 |
| 1. めざすべき地域社会の姿ー基本理念         | 20 |
| 2. 2050年の地域社会像              | 22 |
| VI 将来像実現に向けたシナリオ・方向性(未)     | 25 |
| VII 推進の体制・枠組                | 32 |
| <資料編>                       |    |
| ビジョンを語る会等の開催実績及び意見の分析       |    |
| ビジョン評価指標データ                 |    |
| アンケート調査 調査票、調査結果            |    |
| 2050年の将来像各論                 |    |
| 委員会メンバー・開催状況等               |    |

# I はじめに

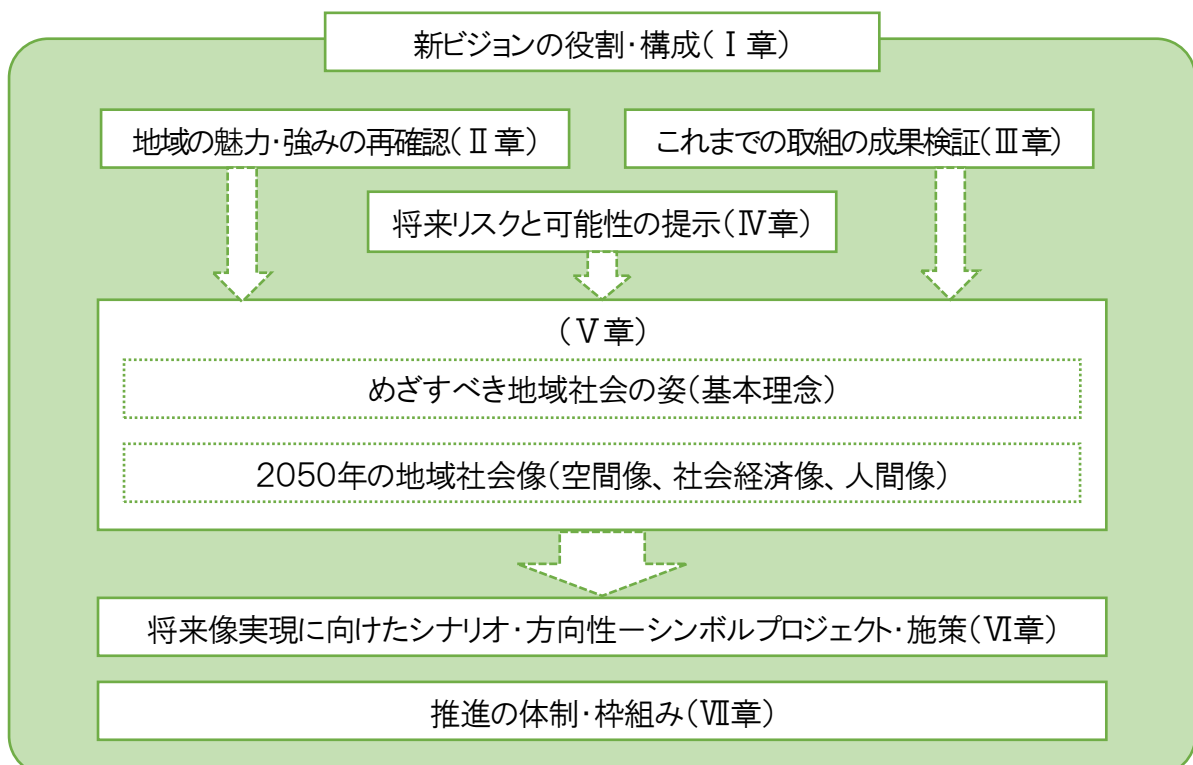
## 1 新ビジョンの役割・性格

- 「丹波新地域ビジョン」（以下新地域ビジョン）は、「丹波地域ビジョン」※が 2020 年に終了するのに伴い、その後継ビジョンとして策定されるものです  
※この冊子では、2001 年策定の「丹波地域ビジョン」を「当初ビジョン」、2011 年改定の「丹波地域ビジョン改定版」を「改定ビジョン」と記しています。両者を指す場合は「地域ビジョン」と記載します
- 新ビジョンは、2050 年を展望して望ましい地域の将来像、ビジョンを描くとともに、ビジョンの実現に向けた道筋、シナリオを示しています
- 新ビジョンは、丹波地域の住民、地域団体、事業者、行政をはじめ、地域のすべての個人・団体の間で共有されるものです。その実現に向けた取り組みも、参画と協働の理念のもと、すべての主体とともに進めていきます。
- 丹波地域に親しみや愛着をもつ地域外の人々（交流人口・関係人口）にも、新ビジョンの実現に向け、活動の担い手になるよう呼びかけていきます
- 新ビジョンは、これまでの丹波の地域づくり（丹波の森づくり※）や「丹波地域ビジョン」の取り組みを発展的に継承していきます  
※丹波の自然と文化の維持・発展に向けた取組を「丹波の森づくり」と呼んでいます。「丹波の森宣言」（昭和 63 年 9 月 1 日）にはじまるその歴史は、30 年以上に及びます（III-1 参照）
- 今日、多くの方が地域の変化の必要性を認識しています。新ビジョンでは、地域ビジョンの「成長しつづけるビジョン」の考え方を受け継ぎ、『**挑戦・成長**』をキーワードに、時代の変化に柔軟に対応し、新たな取組を生み出し続けていくビジョンとします
- 新ビジョンは、『**未来志向**』のビジョンです
  - －挑戦的な目標（ムーンショット）を設定し、そこから遡って（バック・キャストイングして）、近未来（ポストコロナ社会）、現在になすべきことを考えていきます
  - －昔から残る丹波の森、風景や農の営みなどを未来に引き継ぐ一方で、地域資源、人材、絆など地域の強みを活かし、将来の可能性を積極的に追求していきます



## 2 新ビジョンの構成

- 「I はじめに」でビジョンの役割・性格、構成を示したのち、「II わたしたちの丹波ー風土・文化、ポテンシャル」で丹波の多彩な魅力を紹介しています
- 続く「III 丹波の森づくりのこれまでとこれからー継承と発展ー」では、丹波の森づくりの基本概念（森・もりびと）を再確認したうえで、森づくりの成果・レガシーを検証しています。次いで、「地域ビジョン改定版」の将来像の達成状況を評価検証したのち、取組の継承・発展に向けての考え方を明らかにしています
- 「IV 2050年に向けた環境変化」では、人口減少・高齢化、環境・資源制約、超スマート社会という3つのテーマについて、将来展望と地域社会の対応方向を記しています
- 「V 2050年の地域社会像ー望ましい地域の姿ー」では、めざすべき地域社会の基本理念を明らかにするとともに、将来像を描くうえでの基本的視点を明示しています。そしてそれらを踏まえて、空間像、経済社会像、人間像の3つの角度から2050年の地域社会の姿を描いています
- 「VI 将来像実現に向けたシナリオ」では、将来像の実現に向けたシナリオとして、概ね向こう10年間の施策展開の基本方針を示しています。そのうえで、「シンボルプロジェクト」をはじめとする5年間の取組・事業を提示しています。「VI シンボルプロジェクト」において同事業の概要を記しています
- 「VII 推進の体制・枠組」では、新ビジョンの推進に向け、内外の組織・人材をゆるやかにつなぐネットワークの形成などをうたっています。



## II わたしたちの丹波—風土・文化、ポテンシャル

- ◇ わたしたちの丹波は、緑豊かな山々に囲まれ、古来より「森」の恵みを受けつつ、「農」を土台に発展してきた多自然地域です。ここでは、今も日本の伝統的な暮らしや原風景に出会うことができます。
- ◇ 丹波は独自の地勢や歴史・伝統文化等を背景として、多彩な固有の魅力を放っている地域でもあります。丹波の将来を考えるにあたっては、まずこの風土・文化の魅力、ポテンシャルを再確認する必要があります。以下では、その主な特徴を記しています

### [共生]

- 丹波は約 75%が森林で覆われている「森の国」です。どこにいても身近に里山があり、自然とのふれあいを楽しむことができます
- 加古川、由良川、武庫川の源流域に位置し、「源流の里」とも呼ばれる丹波には、ホトケドジョウ、バイカモ、クリンソウなどの貴重種が生息する豊かな自然環境が今もなお残されています。
- 低地地帯「氷上回廊」(p.3 参照) の存在により、丹波は生物多様性に富んだ地域になっています。南方系(瀬戸内海側)と北方系(日本海側)の魚が同じ河川に共存し、南国と雪国の植物が混在して生息しています。

### [豊穡]

- 盆地特有の気候のもと、深い栄養を蓄えた粘土質の土壌、澄んだ空気と清らかな水に恵まれた丹波は、古来より豊穡の地として知られてきました。丹波霧が象徴する昼夜の寒暖の差は作物の生育に絶好の条件を生み出しています
- この豊饒の地であることによって、丹波三宝として全国的に名高い丹波栗、丹波大納言小豆、丹波黒大豆をはじめ、粘りと甘みのある米、山の芋、猪肉・鹿肉、有機野菜など、丹波は今日多彩な産物を誇っています。2021年には「丹波篠山の黒大豆栽培」が日本農業遺産に認定され、300年前から続く持続的な農業が高く評価されることになりました
- 地域の人がふるさと丹波で思い浮かべるものとして、こうした産物の味覚をあげています。それは、人々の心の中でふるさととの重要な構成要素となっています。

### [伝統]

- 豊かな民俗文化が今も残るのが丹波です。秋祭に笛を響かせ太鼓を鳴らす田楽踊りは、室町時代に都から伝えられたものです。一方、この地で興った丹波猿楽が当時都で流行した能楽(猿楽)のルーツとなりました
- 江戸時代の民謡を起源とするデカンショ節は、時代ごとの風土や人情などを読み込んで歌い継がれ、郷土への愛情を育んできました。2015年には日本遺産に認定され、地域固有の文化としてデカンショ節の魅力が改めて発信されつつあります
- 平安時代末期が起源といわれる丹波焼は、日本六古窯の一つとして、2017年日本遺産に認定され、産地は再び活気づいています。江戸時代からその技が受け継がれ

てきた丹波布、丹波木綿も、近年その価値が見直されつつあります

- 城下町（丹波篠山市市街地、丹波市柏原町）や宿場町（福住地区）では、歴史的建造物が保全され、伝統的なまちの佇まいが今も残されています。山裾や川沿いに点在する農村集落には茅葺き民家や白壁の土蔵が残り、日本の原風景を今に伝えています

### [交流]

- かつて丹波は山陰道や京街道などの街道筋として栄え、都や諸国との間で文物の交流が盛んでした。古代には、山陰道を通して都の使いが地方に赴き、丹波からは野の幸、山の幸が都へ届けられていました。加古川、竹田川の舟運によっても、瀬戸内海、日本海の両側から多くの人、ものが運ばれてきました
- 交流は、現代の丹波を特色づけているキーワードでもあります。高度成長期以降半世紀以上にわたり、阪神地域と丹波地域の間で地域間交流が続いています。野外教育施設「丹波少年自然の家」では、自然学校にやってきた阪神間の子どもたちが地元の人々と交流し、大学のサテライト拠点では多くの大学生が地域貢献活動に取り組んでいます。

### [地勢・地質]

- 盆地内にのどかに広がる田園地帯と、それを抱くように連なる比高※ 600m 余の山々によって、丹波では四季折々の変化に富んだ景観が創りだされています  
※山頂と盆地の底といったような、ある地域内における二地点間の高さの差
- 本州一標高の低い中央分水界（水分れ）を中心として、瀬戸内海側と日本海側の風が出会い、生き物が行き交う低地帯「氷上回廊」が形成されています。この回廊があることで、特色ある気候・風土が生み出されてきました
- 1億年以上前の前期白亜紀の地層である篠山層群では、丹波竜などの恐竜類や世界最小の恐竜の卵など、世界的にも貴重な化石の発見が相次いでいます。篠山層群の上には田園地帯が広がり、「農村風景と恐竜が共存する」世界的にも希な地域となっています

### [気質]

- 丹波には温かい人、温厚な気質の人が多くといわれています（丹波という言葉には“ほっこりとした”イメージがあると指摘する人もいます）。そうした気質が移住者など外部の者を受け入れる「寛容性」に富んだ風土を生んでいるとの声もあります
- 丹波の人々の寛容な心は、緑豊かな山々、美しい田園が広がる風土のなかで、自然と共生する暮らしを営んできたことで、知らず知らずのうちに育まれてきたともいわれています。
- 今もなお、集落単位や地区単位（明治時代の旧村などが前身）の絆が強く、自治意識が高いのが、丹波の人々です。それぞれの集落が自立し共存しようとしている、いわば「集落共和国」として存立しているのが、丹波なのです。

## III 丹波の森づくりのこれまでとこれから — 継承と発展 —

- ◇ 丹波では、「丹波の森宣言」(昭和63年9月1日)以降、30年以上にわたって、「丹波の森づくり」と呼ばれる特色ある地域づくりが行なわれてきました
- ◇ 自然との共生を謳い、かつては先導的であった森づくりの理念は、今日では普遍的なものになりつつあります。その理念は、SDGs(持続可能な開発目標:Sustainable Development Goals)の考え方とも軌を一にし、世界で広く共有されるべきものとなっています。また、ふるさとづくりを進めるその考え方は、現在の地域創生の考え方を先取りしたものともいえます
- ◇ 以下では、この地域の財産ともいえる丹波の森づくりの理念と成果を確認するとともに、それに基づき進めてきました地域ビジョンの評価検証を行なっています

### 1 丹波の森づくりの理念、成果

#### 1-1 「丹波の森」、「もりびと」とは

- 丹波の森は幅広い概念です。『私たちを取り巻くすべての環境』が「丹波の森」として理解されています

『森』 = 森林、田園、集落、まちを含む空間全域  
= 人、生き物全ての営み(丹波の風土・文化、生業)  
= 人々の結びつき、ネットワーク

※この新ビジョンでは、「森」と表記するときは「丹波の森」を意味しています。通常  
の森は森林と記しています。

- 丹波の森づくりとは、『人と自然と文化の調和した地域づくり』であり、『みんなの共通のふるさとを創っていこう』とする試みです。地域住民だけでなく、丹波を愛するすべての人のためのふるさとづくりです

『ふるさと丹波のかけがえのない美しい自然はもちろん、暮らしやなりわい、地域内外の人々との交流、生活空間、生活文化など、私たちを取り巻くすべての環境を「丹波の森」と考え、より良い地域づくりに取り組んできました』(丹波地域ビジョン・丹波の森構想)

『「丹波の森がどこにあるのか?」とよく聞かれます。「鎮守の森」のように思っているわけでは、「これが丹波の森です」というのではなく、丹波全体が一つの森に囲まれた、一つのユートピア、丹波に住んでいる人にも暮らしやすいし、外から来ても楽しいところだというみんなの共通のふるさとを創っていこう、これが丹波の森構想だと思えます。』(河合雅雄先生:丹波の森大学講義録『自然と人間』)

- 丹波の森づくりの担い手は「もりびと」と呼ばれています。それは森を愛し、森を守るひとたちの総称です。
- 地域ビジョンではもりびとを「森の市民」と表現し、「地域内外を問わず、丹波地域に誇りと愛着を持ち、丹波の地域づくりに責任を持って行動する自律した人々」と規定し



ています

- 「もりびと」(森の市民)は、**伝統を守りながらも未来社会を切り拓く活動的、能動的な人材(守人・盛人)**として期待される人たちです。自然・風土・文化等の地域の資源を守るとともに、将来を見通したうえで、それらを活用し新しい地域づくりを進めていく人たちです。もりびとに期待される役割は以下のように多岐にわたります

## 1-2 丹波の森づくりの成果とレガシー

### (1) 丹波の森づくりの推進状況

- 「丹波の森宣言」で謳った4つの宣言毎に、丹波の森づくりの取組の推進状況を以下に示しています

#### 宣言1 丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます

→ 森林の管理をはじめとして、丹波らしい土地利用が進むとともに、里山や水辺環境の再生に向けた取組が進展。農地・農業の保全に向け、仕組みづくり、担い手の育成が図られる。野生動植物との共生に向けた活動(希少動植物の保護)が活発化

#### 宣言2 丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます

→ 丹波らしい景観の保全・形成が進んでいます。自然を体感できる場・空間(丹波の森公苑、丹波並木道公園等)が生まれ、景観ネットワークが形成されています(ふるさと桜づつみ回廊、たんば三街道)

#### 宣言3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます

→ 歴史的景観・建造物や文化遺産(日本遺産等)の保全・活用が進められるとともに、自然遺産である恐竜化石を活かした地域づくりが進展。丹波ならではの特色ある芸術・文化の振興(県立陶芸館、シューベルティアードたんば)も図られています

#### 宣言4 丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます

→ もりびとが育ち、様々な分野で活躍。域内外の交流が活発になり、移住・環流、起業が拡大。丹波製品のブランド化も試みられています。ふるさと教育・食育の推進などにより、丹波の誇り(シビック・プライド)の醸成が図られています

### (1) 未来へつなぐ森づくりのレガシーとは

#### [プラットフォームとしての制度的枠組み]

ー県、市の条例施行や広域計画・指針の策定などを通じて、自然、景観、街並、歴史的建造物などの保全の枠組が整備されてきました。今後は、これらの枠組みを堅持するだけでなく、環境変化に応じて柔軟に見直していくことも必要となります

#### [人的資本の蓄積]

ー丹波の森大学等の場を通じて、実践活動の中心となる担い手(もりびと)が輩出されてきました。引き続き、この人材育成の仕組みを維持・発展させるとともに、地域内外での新たな担い手の発掘によって次代への活動の継承を図る必要があります

**[つながり（ネットワーク、ソーシャル・キャピタル）の形成]**

－森づくりの活動等を通じて地区・集落・個人単位で様々な外部とのつながりが育まれています。大学生による社会貢献活動も定着し地域と大学の連携も深化しています。こうしたつながりのさらなる拡大による森づくりの新たな担い手創出が期待されています

**[拠点の形成と特色ある活動の展開]**

－域内では、丹波の森公苑をはじめ各種施設が整備され、生涯学習、環境学習、芸術文化振興等の拠点が誕生してきました。そして、その施設・拠点の活用により、シューベルティアーデたんばなど特色ある活動が展開されています。今後、拠点の機能更新や活動を支えてきた仕組みの継承・発展が課題となります。

**[市民精神の広がり]**

－もりびとの活躍やまちづくり協議会・自治振興会等の活動を通じて、地域主導、県民主役の取組が拡大しています。また、その活動のなかから森づくりを担う新たな組織も生まれています。拡大する自助・共助の活動を内外の多くの人が支える仕組みの構築が今後重要になります

**[ふるさと意識の醸成]**

－地域に愛着を持つ人や地域資源に誇りをもつ人が増え、ふるさと意識が醸成されつつあります。ふるさと意識の高まりこそが、丹波の森づくりの最大の成果でありゴールであることから、次代に向け、ふるさと学習をはじめとするこれまでの取組の継続・拡大が求められています

**(3) 丹波の森づくりの新しい視点・取組方向(未)**

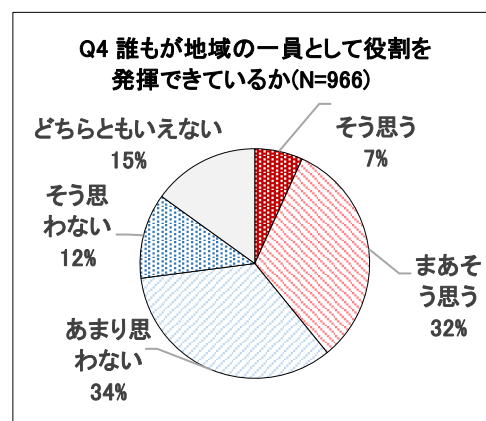
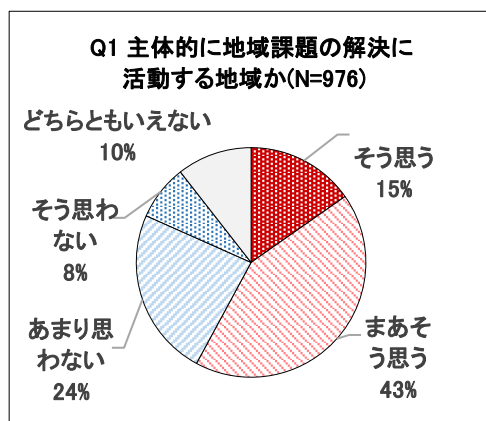
## 2 地域ビジョンの評価検証

- 改定ビジョン（2011年度策定：目標年次：2020年）では、5つの将来像（『自立』、『交流』、『元気』、『絆』、『安全・安心』）を掲げています（改定ビジョンでは、当初ビジョンの将来像の基本的方向を継承していますが、内容・表現については見直しを行なっています）
- 策定後、5つの将来像の達成状況を把握するため、将来像に関連する指標（客観指標74項目、主観指標54項目等）を設定し、毎年度フォローアップに努めてきました
- 新ビジョンの策定過程では、「丹波新ビジョン検討委員会」での議論のほか、「ビジョンを語る会」、「丹波地域夢会議」等の開催や「丹波地域の今とこれからのアンケート」の実施などを通じて、将来像の実現状況について、丹波地域内外の方から多数ご意見を伺いました。こうして集めたデータや意見にもとづき、以下に5つの将来像の達成状況の検証結果をとりまとめています

**将来像1：みんなで創る“自立のたんば”**  
 ー地域の魅力発掘と情報発信、地域を担う人材の育成  
 地域づくりへの住民参加の推進、地域で活動する団体の連携推進

[検証結果]

- ・住んでいる地域に誇りや愛着を感じる人は増加傾向にあります（H22：47.4%→R3：64.7%）。地域活動への参加率（R3:43.8%）が県下（平均：32.9%）で最も高く、地域住民が地域課題の解決に主体的に活動する地域だと思える人が半数以上を占めています（アンケートQ1）
- ・しかし、人口減少・高齢化とともに、ボランティア登録者数（H22：7,147人→R2：4,122人）などは減少傾向にあり、今後の地域づくりの担い手不足を懸念する声もあがっています。また、自治会等の活動が縮小するなど、地域社会の活力低下が懸念されています（自治会等に活気があると感じている人の割合：H25：43.5%→R3：23.5%）。
- ・一方で、誰もが地域の一員として役割を發揮できているとみる人は多くありません（アンケートQ4）。地域づくりの潜在的な担い手はまだいると考えてよいかもしれません



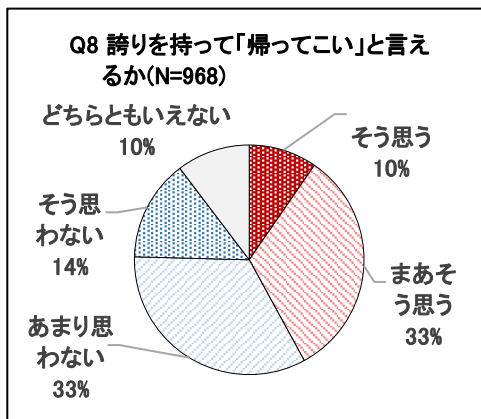
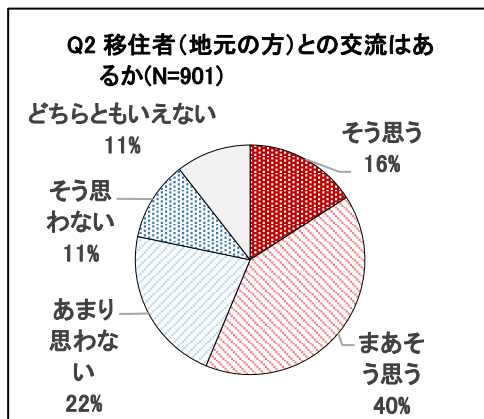
⇒高い地域活動への参加率からみて、“自立”意識が高い地域といえますが、人口減少下で地域力の維持・向上をめざすには、移住者や関係人口はじめ様々な人が参加する新たなネットワークの構築が今後重要になります

**将来像2：都会に近い田舎を楽しむ“交流のたんば”**

－森・川・里の豊かな自然の保全と活用、環境に優しい地域づくりの推進、環境学習フィールドづくり、美しい景観づくりの推進、都市との多彩な交流の推進、丹波の田舎暮らし情報の発信

[検証結果]

- ・丹波の豊かな自然を守りたいという意識は徐々に広がりを見せ、**自然環境を守るための取り組みに参加している人も増えています** (H25:58%→R3:36.3%)
- ・丹波並木道公園などの県立公園や恐竜化石関連施設 (H22:48,767人→R2:115,360人) への来客数が増えるなど、**交流人口は増加しつつあります**
- ・コロナ禍以降、自然とふれあえるたんば暮らしへの関心は一層高まり、相談件数は急増し、**移住者数** (R2:220人) も増加しています
- ・**移住者と地域の方の交流** (アンケート Q2) は進んでいます、UJI ターンを含む移住者の受け入れ環境には改善の余地があるとの指摘があります。**誇りを持って「帰ってこい」といえる地域だ**と思う人はまだ少数にとどまっています (アンケート Q8)



⇒“交流”人口、移住者数とも増加傾向にあります。地域のポテンシャルを考えると、今後、環境を整備すれば、交流、移住はさらに拡大していく可能性があります

**将来像3：やりがいを実感できる“元気なたんば”**

－地域の産業をリードする農林業の振興、商店街の活性化・ものづくり産業の振興、丹波の魅力を活かしたツーリズムの推進、地域の資源を活かした「しごと」の創出、地域づくり活動・文化活動の推進、若者の就労促進

[検証結果]

- ・この10年間で作付面積は減少し、耕作放棄地は増加していますが、**農林産業産出額は増加しています**。GDPに占めるシェアは低いですが、**農林業は丹波地域の活気に結び付く産業と認識されています** (アンケート Q6)

- ・ 製造品出荷額、商業年間販売額とも堅調に推移しています
- ・ 観光面では、入込客数、消費額とも伸びています。地域の人も訪問客の増加を実感し、宿泊業、飲食業が地域に活気をもたらしていると感じています
- ・ 「しごと」の面では、自分の仕事にやりがいを感じる人が全県と比較しても高い反面 (R3:70% > 全県平均 63.4%)、就職・転職・起業しやすい環境が整っているとみる人は少数 (R3:7.4%) にとどまっています
- ・ 住んでいるまちや地元企業に活気があると思う人は県下平均を下回っています (R3:21.6% < 全県平均 26.6%)

⇒ 地域経済は概ね堅調に推移していますが、新たな活力創出には、農林業、観光等の移出 (外貨獲得) 産業の拡大とその富 (所得) の域内循環の促進が鍵になります

⇒ 時間や場所にとらわれない働き方が浸透するなか、各人のやりがいを満たす多様なしごとの創出が課題となります

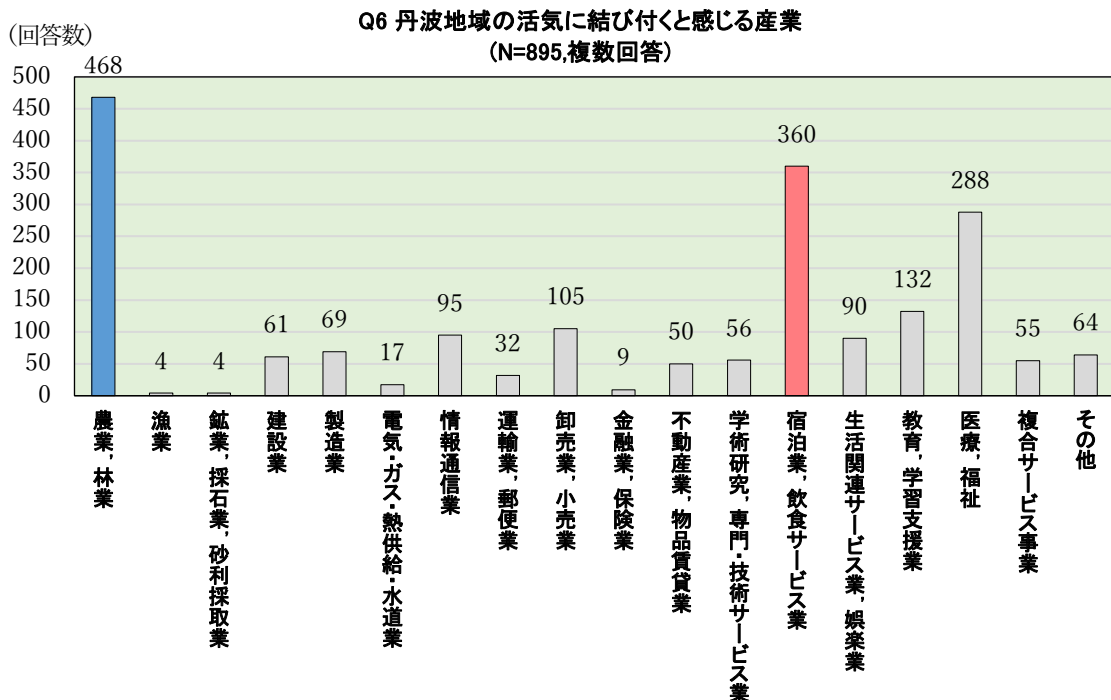
表 主要経済指標の変化

| 項目        | 基準値※1 |             | 直近値   |             | 変化    |   |
|-----------|-------|-------------|-------|-------------|-------|---|
| 域内総生産     | 2011年 | 338,378 百万円 | 2019年 | 432,836 百万円 | 27.9% | ↑ |
| 農林産業産出額   | 2010年 | 12,590 百万円  | 2018年 | 13,537 百万円  | 7.5%  | ↑ |
| 製造品出荷額等※2 | 2009年 | 437,329 百万円 | 2019年 | 546,399 百万円 | 24.9% | ↑ |
| 商業年間販売額   | 2006年 | 162,204 百万円 | 2014年 | 172,665 百万円 | 6.4%  | ↑ |
| 観光入込客数    | 2010年 | 4,417 千人    | 2019年 | 5,072 千人    | 14.8% | ↑ |
| 観光消費額     | 2010年 | 329 億円      | 2019年 | 424 億円      | 28.9% | ↑ |

※1 改定ビジョン策定年 (2011年) の直近値。年 (年度) は調査年 (年度) ではなく実績年 (年度)

※2 従業者4人以上の事業所

(出典：市町民経済計算、農林水産業センサス、工業統計、商業統計、観光動態調査)

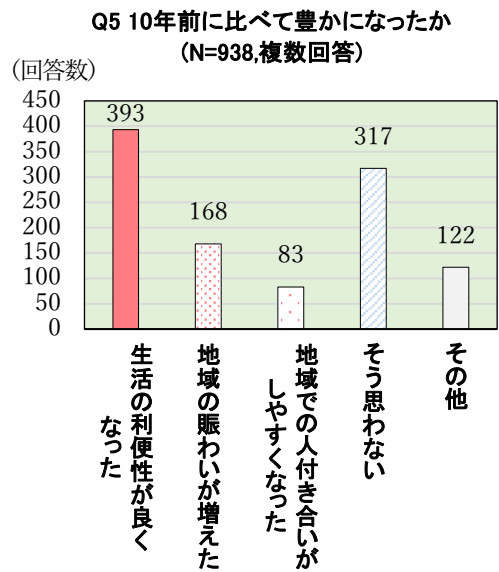


**将来像4：多世代が支え合う“絆のたんば”**

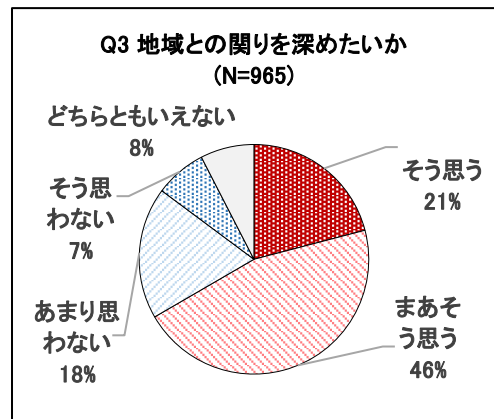
－地域コミュニティの再生、地域ぐるみでの子育て推進、高齢者が安心して暮らせる地域づくり、高齢者が活躍できる地域づくり

[検証結果]

- ・住んでいる地域で「頼りになる知り合いが近所にいる」(R3:71.1%>県下平均62.4%)、「異なる世代の人との付き合いがある」(R3:68.4%>49.3%)と回答する人の割合が県下でも高く、地域内のつながり、信頼が強い地域であるといえます
- ・一方、そのつながりが地域での子育てのしやすさにつながっているかという点、必ずしもそうとはいえないのが現状です(子育てしやすいと思う人の割合-R3:47.9%<県下平均58.8%)



- ・高齢者の暮らしやすさも、都市部に比べあまり高く評価されていません(高齢者にも暮らしやすいと思う人の割合-R3:43.7%<県下平均54.2%)。高齢者の知恵や経験が積極的に活用されていると感じる人の割合もあまり高くありません



⇒“絆”の強い地域であり、地域との関わりを今よりも深めたいと思っている人が多数にのぼります(アンケートQ3)

⇒この10年で生活の利便性が良くなったと思う人(アンケートQ5)が増えているのですが、さらに暮らしやすい地域にしておくためには、生活・子育て支援サービスの一層の充実が求められます。また、高齢者をはじめ各人が如何なく能力を発揮できるよう、様々なしごとや学びの場の創出に取り組んでいく必要があります

**将来像5：ともに暮らす“安全安心なたんば”**

－災害に強く、犯罪のない地域づくりの推進、誰もが暮らしやすいユニバーサル社会の実現、障害のある人も外国人も共に暮らす地域社会の実現、医療や健康、食の安全が確保された安心な地域の実現、

[検証結果]

- ・犯罪認知件数(H22:598件→R2:372件)や交通事故死傷者数(H22:656人→R2:257人)は減少傾向にあります。「治安が良く安心して暮らせると思う人の割合」(R3:85%)は県下平均(79.6%)を上回っています

- ・防災面では、防災訓練や防災リーダー養成講座への参加者や住宅再建共済制度への加入者が増えるなど、**防災意識**が高まってきていることがうかがえます
  - ・**だれもが暮らしやすいユニバーサル社会**の実現という点では、**移動・交通の利便性**への評価が低い（公共交通は便利だと思ふ人の割合－R3：12.2%）こともあり、達成されたとみる人は少数にとどまっています（R3：25.8%）
  - ・県立丹波医療センターの開設、医師（かかりつけ医）を持つ人の増加などにより、**健康・地域医療**への安心感が高まっています。健康とを感じる人も増えています（H22：58.2%→R3：63.4%）
- ⇒総合的にみて、“安全・安心”な地域社会づくりは、進んでいるといえますが、暮らしやすい地域にしていくには、一人ひとりに寄り添ったきめ細かな支援や交通等の基盤整備が必要になります

[検証結果まとめ]

- 以上の検証結果から、地域ビジョンの将来像の実現に向け、この10年間一定程度進展があったことがうかがえます。
- しかし一方では、人材育成（「自立」）、まちの活力（「元気」）、子育て環境、高齢者の暮らしやすさ（「絆」）など、個々の課題も浮き彫りになりました。
- また、地域づくり（丹波の森づくり）が進展した反面、人口減少・高齢化のなかで、コミュニティ機能の低下が懸念されています
- 新ビジョンでは、地域ビジョンで成果を上げてきた取組を発展的に継承するとともに、課題の解決に向け、新たな取組の検討にあたります

### 3 これからの森づくりに向けて

- 丹波の森づくりは、制度の整備、担い手の形成、ネットワークの構築、拠点の形成、特色ある活動の展開、市民精神の広がり、ふるさと意識の醸成などの点で成果がみられました。この基盤・成果を活かしつつ、これからの地域づくりを進める必要があります
- 地域ビジョンのもとで、丹波の森づくりは里山づくりから景観形成、文化振興、賑わいづくり、人材育成まで、様々な分野に広がってきました。この活動の広がりが評価される一方で、活動の多様化に伴い森づくりのエネルギーが拡散してしまったと見る向きもあります。また、若い世代を中心に森づくり自体知らない人も増えてきています。今一度、原点である理念に立ち返り、運動としての森づくりの気運を高めていくことが必要となっています。
- 丹波の森づくりの理念（『人と自然と文化の調和した地域づくり』）やそれを踏まえた地域ビジョンの基本理念（『3つの環－自然、人、産業の環』※）は、今の時代においても尊重すべき考え方です。むしろ、人口制約、環境制約により持続可能な社会への転換がより差し迫った課題である今日のほうが、その理念に立ち返って物事を考える必要があるとあってよいでしょう。
  - ※『丹波のいのち（＝自然）、ひと（＝人間）、なりわい（＝産業）の3つの環をはぐくむ（「守り」「育て」「活かす」』（当初ビジョン）
    - 『いのちをはぐくむ・自然の「環』』は自然との共生、いのちの循環の促進、『ひとをはぐくむ・人間の「環』』は人のつながりの拡大、『なりわいをはぐくむ・産業の「環』』は産業間の連携拡大をめざすものです
- 一方、地域社会に目を向けると、地域（森）づくりが進展するなかでも、人口減少・高齢化に伴いコミュニティ機能の維持が年々難しくなりつつあります。このため、これまでの習慣や枠組みにとらわれず、時代に即した新しいコミュニティのあり方を模索していく必要があります。地域住民とともに、地域に愛着、関心のある様々な人にも、コミュニティの担い手として活躍してもらおう新たな仕組みを整えていくことが重要になっています
- そこで、新ビジョンでは、

#### 『丹波の森づくり第2章：つなごう丹波の森づくり（世代をつなぐ、環をつなぐ）』

をキャッチフレーズにうたいます。「第2章」を宣言することで、新しい時代の到来を告げるとともに、時代の変化に対応した新たな取組を進める気概を示そうとしています。また、「つなごう丹波の森づくり」とうたうことで、丹波の森づくりや地域ビジョンの理念を尊重し次の世代に受け継ぐとともに、その理念がめざす持続可能な循環型社会の実現に向け（環をはぐくみ、つなぐ）取組を推進する姿勢を示そうとしています



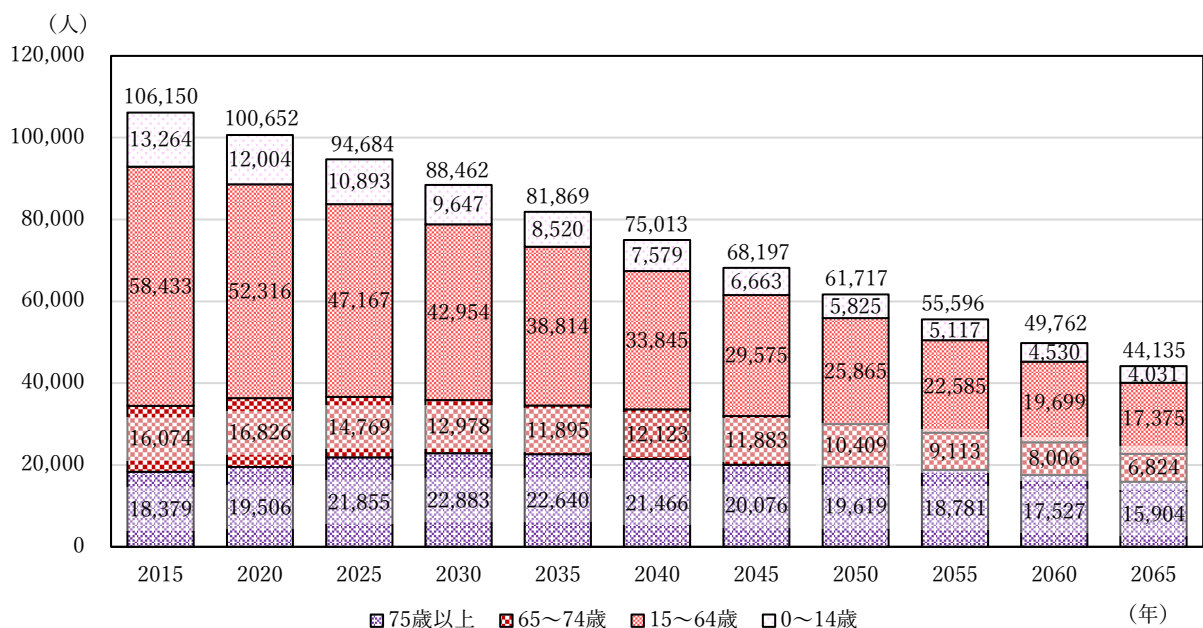
## IV 2050年に向けた環境変化

- ◇ 将来像を描くにあたっては、これからの社会の環境変化を踏まえる必要があります。そこで以下では、2050年に向けてのリスク要因となり得る人口減少・高齢化と環境・資源問題を取り上げるとともに、その解決要因になる可能性を秘めた超スマート社会（Society5.0）の到来について考えてみます

### 1 長期的な人口減少・高齢化

#### 1-1 人口推移・推計

- 丹波地域は全国、兵庫県（平均）よりも速く、2005年に人口減少時代に突入しました（2005年人口（116,055人）は、明治初期（明治14年）の人口水準を下回りました（出典：国勢調査等）
- その後人口減少は加速化し、丹波地域の2020年人口は101,148人（国勢調査速報値）にまで減少しました。2000年、2010年と比べて、それぞれ8.9%、4.7%の減少です
- 2050年の人口は、2020年人口（101,148人）から40%近く減少し、6万人台にまで低下することが予測されています（兵庫県人口シミュレーション）。これは、江戸時代中期以前の人口水準に相当します
- 丹波の高齢化率（65歳以上の人口割合）は2050年には50%近くにまで上昇すると予測されています。それとともに、後期高齢者（75歳以上）の人口割合は、概ね2020年の高齢化率（65歳以上）に相当する30%台前半にまで上昇します
- 一方、子ども（0～14歳）も、生産年齢人口（15～64歳）も、2050年に現在の半分以下の水準にまで低下すると予測されています



※2015年は国勢調査、2020年は国勢調査（速報値）ではなく推計人口

（出典：兵庫県将来推計人口）

図 丹波地域の年代別人口予測（2015年～2065年）

## 1-2 人口減少社会への対応

- 地域の持続的発展には、人口数の維持（人口減少数の抑制）よりも、むしろ「地域活動総量」の拡大を重視していく必要があります。すなわち、現実・仮想空間での人の接触・交流、情報、モノ、カネの流通・循環の促進が発展の鍵となります
- 人口減少下では、定住人口だけでなく、関係人口のなかにも地域の担い手を求めていく必要があります。そのためには、開かれた地域社会の形成が重要な課題となります
- 人手をかけずとも持続可能な地域のあり方を考えることも重要です。デジタル技術の活用による空間管理の省力化、無人化や仕組み・制度の刷新による集落運営の効率化などが期待されます
- 長期的な傾向として、人口減少は免れ得ないものですが、現在のコロナ禍における密から疎への流れは、大都市から地方への新たな人口移動を引き起こしつつあります。実際、丹波地域でも、移住者の数は増加傾向にあります
- 「逆都市化」(counter-urbanization) と呼ばれるこのトレンドが定着すれば、大都市に近接するも、豊かな自然に恵まれた丹波地域では、地域全体の人口減少が続くとしても、人口増の地区・集落が現われる可能性があります

## 2 環境制約・資源制約の深刻化

### 2-1 予想される将来リスク

- 2050 年頃までに二酸化炭素と他の温室効果ガス排出量を大幅に削減し、ネットゼロにしない限り、21 世紀中に世界の気温は 2 度以上上昇すると予測されています。これを受け、我が国でも 2050 年までの脱炭素化（カーボンニュートラル）を宣言し、脱炭素に向けた持続可能な地域づくりの推進を図ろうとしています
- 地球温暖化（気候変動）の影響等を受け、今後数十年の間に世界で推計 100 万種の生物が絶滅する恐れがあるといわれています。生物多様性は地域の自然社会条件に依存することから、地域自らその保全に取り組むことが重要になっています。
- 中長期的に、世界の経済発展に伴う資源の需要増等により、化石燃料や原材料資源の枯渇が予測されています。これまでのように経済発展に比例して資源利用を増やすことが許されなくなりつつあり、資源効率性の高い経済システム（適量生産・適量購入・循環利用）への転換が求められています
- 食糧に関しても、途上国での人口爆発、気候変動、水資源制約等を背景に、将来需給の逼迫が予測されています。地産地消の推進や食品ロスの削減に向けた取組がこれまでに増して重要になりつつあります

### 2-2 ローカル・アクションの方向性

- 丹波の森づくりや SDGs の理念に沿って、森、里山、河川・ため池などを守り、活かすことで、将来にわたって、自然（生き物）と共生する暮らしが可能な地域社会であり続けることを求められています

- 環境負荷をかけない地域社会の発展方策や暮らしの質（QOL）向上の途を探る必要があります。低炭素住宅の導入や電動車の普及等を進め、暮らしの快適性・利便性を高めつつ、ゼロカーボン社会（脱炭素社会）の実現をめざすことが期待されています
- 食の豊かさを誇る丹波です。地産地消をさらに拡大し、食糧供給、食の安全・安心の確保を図るとともに、食品廃棄物の再生利用（飼料化・肥料化・メタン化）やフードマイレージの低減化を進めていくことが期待されています
- 資源利用の最適化に向けては、地域資源を共有し、その相互利用を促進する共有経済（シェアリング・エコノミー）、持続可能な形で地域資源を循環利用する循環経済（サーキュラー・エコノミー）の確立が重要になります
- エネルギー面での自立・分散型社会の実現も将来に向けての課題です。森林が 75% を占める丹波の地の利を生かして、集落・地区単位でバイオマス発電を中心とした再生可能エネルギーの導入を進めることが期待されています
- 環境・資源リスクへの対応が新たなビジネスや産業の創造を促す、すなわち、環境保全が経済振興・社会発展につながる仕組みを築いていくことが重要です。環境、経済、社会の好循環（Win-Win の関係）を実現する地域社会の構築が求められています

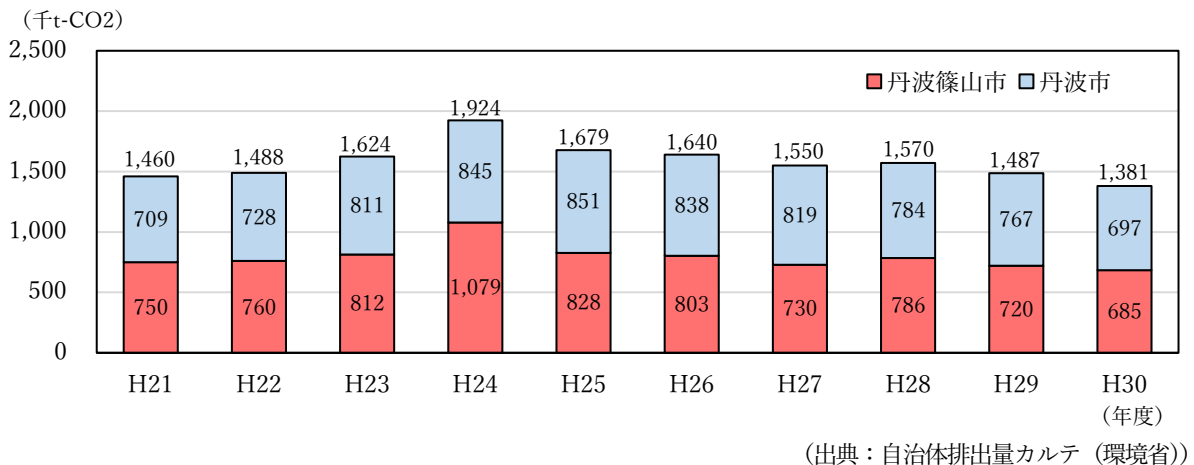
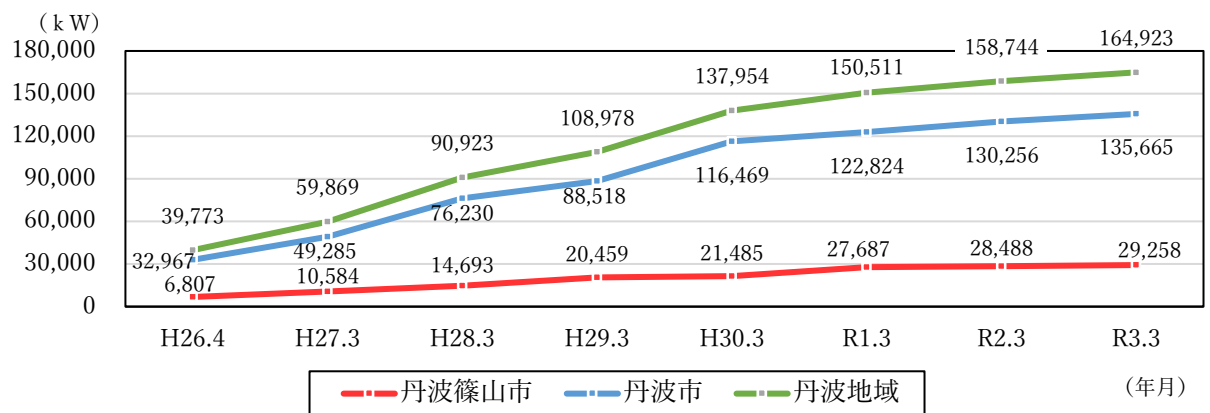
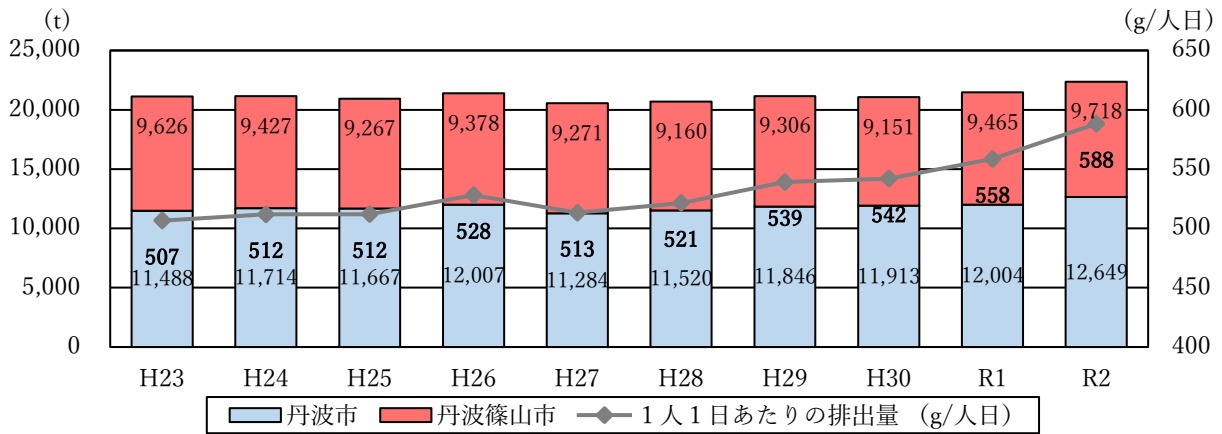


図 温室効果ガス (CO2) 排出量の推移



※ 再生可能エネルギー＝太陽光＋風力＋水力＋地熱＋バイオマス (出典：固定価格買取制度情報公開用ウェブサイト)

図 再生可能エネルギー導入容量の推移







(出典：丹波篠山市、丹波市調べ)

図 家庭ゴミ総排出量、一人あたりの家庭ゴミ排出量の推移

### 3 超スマート社会の到来

#### 3-1 デジタル技術がもたらす社会変革

- デジタル技術の進歩によって、インターネット (IoT: Internet of Things) で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有される社会が到来します。その知識・情報を活用することで、新たな価値、イノベーションが生まれ、社会課題の解決が進むと期待されています。
- リアルタイムで情報が集積 (ビッグデータ化) され、解析 (AI (人工知能) の活用) されることで、生産・流通、都市空間・インフラ等の最適制御が可能になるといわれています。サービス面でも、必要なモノやサービスを、必要な人に、必要な時に、必要なだけ提供することが可能になると期待されています。
- AI やロボット、自動走行車等の技術によって、人の可能性の広がる社会、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会が実現するといわれています。
- 人はアバター (分身) としての AI やロボットの活用により、ルーティンワーク (仕事・家事) から解放され、人間らしさ (自分らしさ) の追求に向け、創造的な活動に向かうことが予想されています。

|   |  |  |   |
|---|--|--|---|
| <p><b>AI (人工知能)</b> </p> <p>2030年<br/>ヒトと違和感なくコミュニケーションが取れる</p> <p>2036年<br/>AIが普及し、大半の業務を自動化することができるようになる</p> | <p><b>人型ロボット</b> </p> <p>2031年<br/>当人の代わりに買い物をしたり他の人と出会ったりすることを実現する、等身大のパーソナルロボットやテレプレゼンスロボットの開発と普及</p> | <p><b>自動運転車</b> </p> <p>2025年<br/>高速道路での自動運転市場化 (レベル4)</p> <p>2034年<br/>完全自動運転 (レベル5) - 全国各地で導入可能に</p> | <p><b>空飛ぶ自動車<br/>ドローン</b> </p> <p>2030年<br/>ドローンによる食材・日用雑貨の自動宅配サービスが普及</p> <p>2033年<br/>空飛ぶ自動車が都市部でも人を運べるようになる</p> |
|---|--|--|---|

※ 記載されている年は、社会的実用時期 (= 実現された技術が製品やサービス等として利用可能な状況となる時期)  
 (「第11回科学技術予測調査」(2019) [文部科学省科学技術・学術政策研究所] を加筆・編集)

図 1 主要スマート技術の将来予測

## 3-2 地域社会の新たな可能性

- デジタル技術によるサービス革新（DX：デジタル・トランスフォーメーション）により、人口減の地域社会でも、個人的、潜在的ニーズに対応する、きめ細かなサービスの提供の実現が可能になります。自動走行車等の出現によって、高齢者等も自由に移動できるようになります。
- 超スマート社会が到来し、地理的・時間的制約から解放されることで、大都市から離れ、人口減の進む多自然地域でも、居住地、就業地としてのポテンシャルが高まります。特に、二地域居住、多拠点居住する人も増え、多様な人材が地域に集まりやすくなります
- 居住地、滞在場所の選択にあたっては、生活の利便性よりもむしろ、各人の創造活動を支える場（創造都市・創造農村）としての可能性が重視されるようになります。地域では、ビジネス、アート、暮らしの各分野で創造的活動に取り組む人（クリエイター）たちが活動しやすい環境づくり（価値創発の風土づくり）が重要になります
- センサー技術、AI、ビッグデータの活用によって、地域社会の空間・ストック（森林・田畑・家屋等）管理やエネルギー供給等の最適化が図られるようになります。生産現場での省力化、自動化、無人化も進みます。
- 仮想空間を介して新しい人と人、人とモノとの関係性の構築が図られることで、地域社会を支える多様な担い手の確保が可能になると考えられています

表2 今後各分野で実現するスマート技術（～2035年）

| 分野       | 科学技術トピック  | 社会的実現時期 |
|----------|---|---------|
| 森林       | 木材の伐採・搬出・運材・加工の自動化技術の確立   | 2030    |
|          | 野生動物の個体数管理のための効果的な捕獲技術及び革新的な獣害防止技術の確立                                 | 2031    |
|          | 土砂災害等を未然に防ぐ森林管理技術の確立  | 2033    |
| 農業       | 人間を代替する農業ロボットの導入  | 2029    |
|          | 農業の生産性、人手不足・担い手不足の解消を抜本的に改善するAI、IoT、ロボット等技術の確立—スマート（全自動）農業の実現         | 2031    |
| 食料       | 人工肉など人工食材をベースに、食品をオーダーメイドで製造（造形）する3Dフードプリンディング技術の確立                   | 2028    |
|          | 生産・流通・加工・消費を通じた完全循環型フードバリューチェーンの構築                                    | 2032    |
| エネルギー    | 小都市（人口10万人未満）における100%再生エネルギーのスマートシティ化を実現する、スマートグリッド制御システムの構築          | 2033    |
|          | 木質系バイオマス発電の経済性を向上させるための人工林循環生産システムの構築                                 | 2035    |
| 医療<br>介護 | 遠隔で、認知症などの治療や介護が可能になる超分散ホスピタルシステム（自宅、クリニック、拠点病院との地域ネットワーク）の確立—AI医療の実現 | 2030    |
|          | 自立した生活が可能となる、高齢者や軽度障害者の認知機能や運動機能を支援するロボット機器の導入                        | 2030    |
| 移動       | 超高齢社会において、高齢者が単独で安心してドアからドアの移動ができる、地区から広域に至るシームレスな交通システムの確立           | 2031    |

※ 実現された技術が製品やサービス等として利用可能な状況となる時期

（「第11回科学技術予測調査」（2019）〔文部科学省科学技術・学術政策研究所〕を加筆・編集）

## V 2050年の丹波を描く—望ましい地域社会の姿—

- ◇ 地域のポテンシャルやこれまでの地域づくりの成果を踏まえつつ、将来社会の潮流変化を見据え、2050年の丹波の望ましい地域社会の姿を描いています。
- ◇ さらに空間像、社会経済像、人間像の観点からその姿をより具体的に示しています

### 1 めざすべき将来の姿—基本理念—

#### 基本理念

人と技術の力を活かした、自然の中での多彩な暮らしのカタチの創造・発信  
—「人」を創り、「森」を（守り）活かし、新たな「価値」共創に挑む—

- 「暮らしのカタチ」とは、2050年に到来する社会（脱炭素社会、超スマート社会等）のもとでの最適（快適）な暮らし方です。その創造・発信を基本理念に掲げます。
- 暮らしのカタチは決して画一的なものではなく、丹波に関わる一人ひとりが、夢の実現に向け自分らしい暮らし方、住まい方、働き方を選択することで多彩なものになっていきます。2050年の丹波は、豊かな住環境とともに、「全ての人を温かく包み込む、開かれた地」、「多様な機会と選択肢に恵まれた約束の地」であることをアピールし、多くの人を受け入れ、多彩な暮らしのカタチを創りだしています。
- 2050年には「人」の力というものが、今以上に問われます。AIやロボットが普及するなかで、人は創造的な活動に従事する時間が増え、すべての人が創造的人材であることを期待されます。人の創造力・想像力が地域を変える源となります。人が最大の資源であり、人材育成が重要になります。
- 2050年、「技術」が人口減少や環境制約の克服、生産性の向上に大きく貢献する可能性があります。地域に見合った技術を能動的に選択し、暮らしやすい地域社会を実現するとともに、デジタル技術等を活用して新しい産業を興し、個々人のニーズに応じた新しいサービスを生み出していくことが期待されています。自然との共生を人の知恵とともに技術の力を使って進めることも重要です（自然×人×技術のビジョン推進）。
- 丹波の「森」は守るべき存在であるとともに、暮らしを豊かにするために活用すべき貴重な資源です。その賢明な利用（循環利用）によって、環境問題を解決するだけでなく、農、食等を中心とする持続可能な産業構造の構築（環境・社会・経済の好循環）や食、エネルギーの安定的確保（自給率向上）などが可能になります
- 2050年の丹波では、多彩な「価値」、「魅力」が生み出されています。技術革新がもたらす生活の利便性、快適性の向上につながる価値や、「森」の資源を活かし磨き直すことで生まれる、世界の中で、丹波でしか体験できないオンリーワンの魅力（固有価値）が創出されています。それによって、丹波を訪れたい人、住みたい人、丹波と関わりたい

い人が将来にわたって増えていくことが、われわれの願いです

- 世界に通じる**普遍的価値**の創造もわれわれの目標です。SDGsの達成や超スマート社会への対応など、世界が共有する課題の解決に向け、丹波スタイル、すなわち「人と技術の力を活かした、自然の中での多彩な暮らしのカタチ」(＝持続可能な自律分散型居住モデル)の創造・発信に挑戦します。「丹波の森」は、内外の様々な人たちと結びつきながら、「**未来社会の暮らしの実験場、共創空間**」となり、新たな価値を生み出していきます。

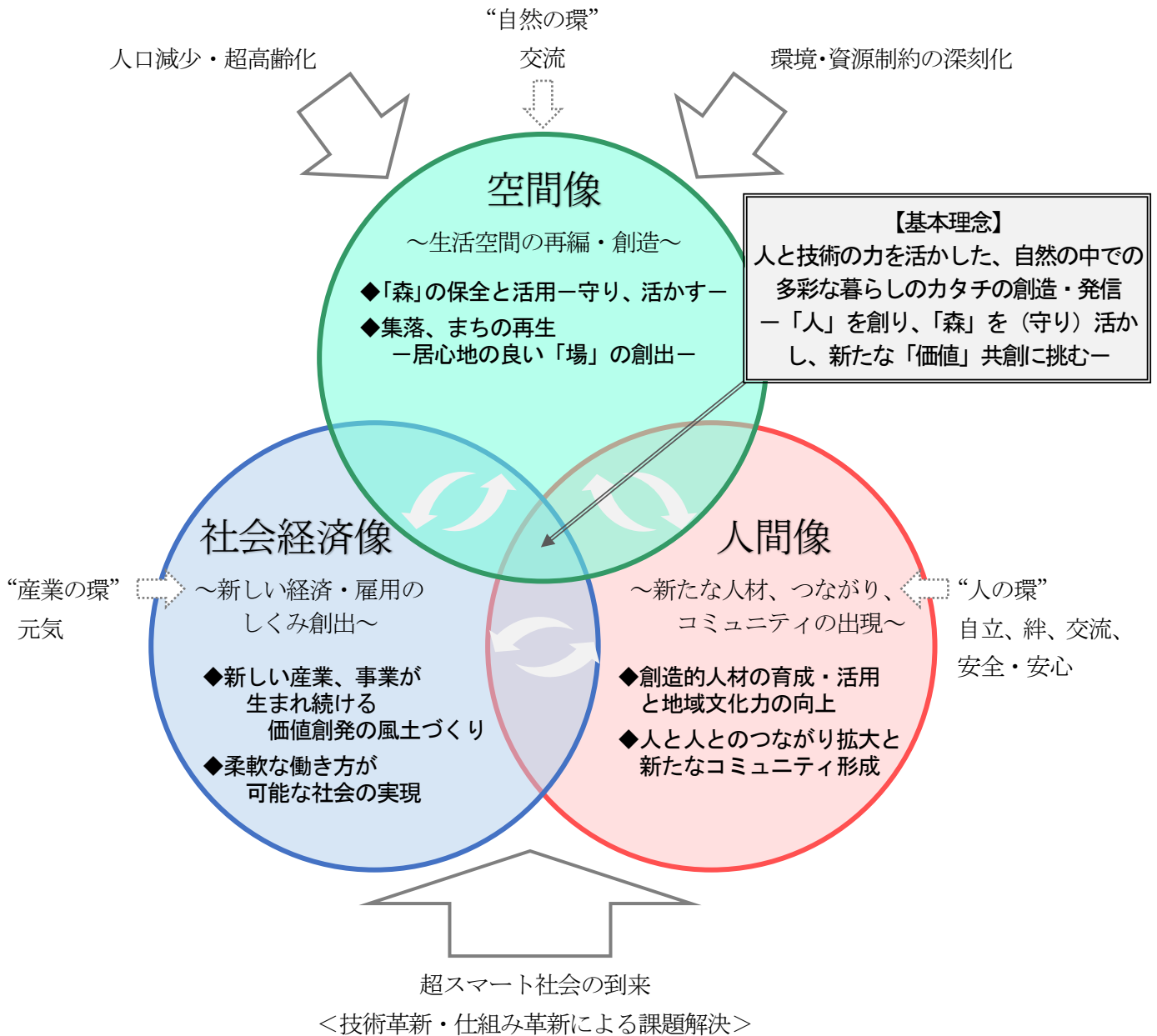


図 新地域ビジョンの基本理念・地域社会像

## 2 2050年の地域社会像

- ◇ 基本理念を踏まえつつ、2050年の地域社会像を空間像、社会経済像、人間像の観点から具体的に示しています。

### 1-1 空間像—生活空間の再編・創造—

◆ 「森」の保全と活用—守り、活かす—

- ・丹波固有の環境・景観は変わることなく、未来へと受け継がれている一方で、空間の効率的な管理、有効活用が進みます

◆ 集落、まちの創生—居心地の良い「場」の創出—

- ・新しい時代の暮らし方、住まい方、働き方に適した空間として、集落、まちは変化していきます

- 100年前と変わらない、多様な生き物が棲む豊かな森が残っています。憩いの場や暮らしの場としての森、里山の利用が拡大しています
- 森は生業・生産の場（資源、エネルギー源）として再生しています。麓の集落では、木質バイオマスによるエネルギー自給率100%を達成しています
- 河川では、安全や維持管理に配慮しつつ、自然を生かした整備が進んでいます。水辺には子どもたちが水遊びを楽しめる空間や、生き物が生息しやすい瀬や淵など多様性に富んだ環境が育まれています
- 集落では、共有化（公有化）の進展とデジタル管理技術の導入で、家屋、土地やコミュニティのシンボル（神社仏閣、鎮守の森等）の保全が図られています。関係人口が集落に日常的に滞在し、地域の担い手として活動しています
- 集落のなかには、居住者がいなくても、農業生産施設やスポーツ・文化施設、まるごとホテル、ビジネスパークなどとして維持・活用されるところも出現し、まちに对人（有人）サービス機能が集約されています
- 集落、田畑、里山、水辺が保全され、日本の原風景的な丹波らしい景観がそのまま残り続けています
- まちでは歴史的建造物が大切に管理され、趣ある街並み景観がそのまま維持されています。その一方で、まちなかのそこかしこで古い施設・家屋が改修され、ふれあい・交流の場（まちの居場所）やオフィス、起業・創業拠点、創造的活動の空間等へと変身し、まちはかつての賑わいを取り戻しています
- まちと集落の二地域居住も進展しています。まちと周辺集落で1つの「自立分散型居住圏」を形成しています



## 1-2 社会経済像—新しい経済・雇用のしくみ台頭—

### ◆ 新しい産業、事業が生まれ続ける価値創発の風土づくり

- ・超スマート社会の到来とともに、新しい産業構造（エコシステム）が出現し、新たな製品・サービスが生まれています
- ・共有経済（シェアリング・エコノミー）が発展し、新たな地域経済循環が生まれています

### ◆ 柔軟な働き方が可能な社会の実現

- ・しごとのスタイルは大きく変わります。しごとと生活の境界がなくなり、各人のライフスタイルにあわせた柔軟な働き方が可能になります

- 地域産業、農林業、IT産業の融合、産官学民の連携により、地域発イノベーションを起こす新たな仕組み、ネットワークが形成され、起業・創業しやすい環境(エコシステム)が生まれています
- デジタル技術を活かし、地域資源を活用した新しいビジネス・サービス (MORTIEC※) が創造されます。地域で創り、産み出す「地創地産」「地産地創」の実践が図られます  
 ※MORTIEC=森、農、食、コミュニティの分野におけるDX（デジタル・トランスフォーメーション）の総称
- 食のバリューチェーン（食関連産業の集積・連携）が形成され、付加価値の高い商品・サービスの開発が進みます。丹波は食材の供給基地から新たな食ビジネス、食ツーリズム、食文化の創造・発信拠点へと転換していきます
- 多拠点居住の拡大やツーリズムの多様化（脱観光化）に伴い、訪問者・滞在者が増加し、ツーリズムが地域経済の主要産業の1つとしてさらなる成長を遂げます
- 生産・流通・サービス活動、空間管理の現場における無人化、省力化、自動化が進みます（無人農業、無人店舗、ロボット介護等）
- マルチワーク（兼業・副業）が基本になり、多くの人が多種多様な（有償・無償の）しごとの組み合わせにより自らのライフスタイルを創造するようになります。
- 森、集落、まちの至る所にワークスペースが出現します。その日の気分や都合でどこでも働くことができるようになります
- 共有経済（シェアリングエコノミー）のもと、空間、モノ、移動手段、人材（知識・スキル）等の共有化、相互利用が進展します。それにより、社会ストック、人材の有効活用や働き方の多様化が進むとともに、‘モノを持たない、お金をかけないリーズナブルな暮らし’が可能になります。デジタル通貨が共有経済の基軸通貨になります

### 1-3 人間像—新たな人材、つながり、コミュニティの出現—

#### ◆ 創造的人材の育成・活用と地域文化力の向上

- ・自然と共生する暮らしが基本であり続ける一方で、多彩なライフスタイルが花開く場となります
- ・それが魅力となり、丹波を居住、活動の場を選択する創造的人材が増える一方で、体験、学習を通じて地域のなかから創造的人材が育っています

#### ◆ 人と人とのつながり拡大と新たなコミュニティ出現

- ・丹波を愛し、丹波を支える人たちのネットワークが地域を越えて拡がり、丹波外に居ても、丹波の担い手になる人が増えています
- ・デジタル技術の活用や仕組みの革新により、より安心、便利に暮らせる生活環境や誰もが能力を発揮できる基盤が整備されたコミュニティが出現します

- 丹波ならではの自然とのふれあい、食の豊かさ、農の楽しみを享受しつつ、やりたい暮らし、しごとを実現し、個性的なライフスタイルを謳歌している人が増えています
- 年齢、性別、国籍、障がいの有無に関係なく、誰もが担い手（もりびと）となって地域社会のなかで自らの役割を見出すことができるようになります
- デジタル技術を駆使し、地域課題の解決や暮らしに役立つサービスの開発に挑むイノベーターとしての市民（もりびと）が輩出されます
- 100歳超のシニアがAI、ロボットの助けを借りて現場で活躍できるようになり、伝統技術の継承や担い手の育成も進んでいます
- 地域固有の文化を継承しつつも、創造的活動の場として、内外から多種多様な人々を招き入れることで、新しい文化の発信拠点へと発展します
- 世界の叡智が丹波に結集し、多国籍チームで地域課題の解決にあたっています
- 自然学習、体験学習等を通じて、子どもたちが感性と知性のバランスのとれた創造力（想像力）豊かな人間へと成長し、創造的活動の担い手になっています
- 自治会・地域運営組織が仮想コミュニティ化し、関係人口（電子市民）の参画を得ながら、地域自治・経営を進めています（デジタル・ガバナンスの推進）
- 地域情報のビッグデータ化とAIの導入により、個々人のニーズに寄り添った情報が配信されるようになり、災害時の避難も安全に行えます（情報のパーソナル化）
- 空の移動革命が現実のものとなります。丹波の空を「空飛ぶ車」が飛び交い、いつでも、どこでも行きたいところに行ける時代になります（移動のパーソナル化）
- デジタル技術を活用して、子育て、介護を地域社会全体で支える新たな共助の仕組みが構築され、必要な時に必要な人が使えるシェアリングエコノミーが進みます

## VI 将来像実現に向けたシナリオ・方向性(未)

- ◇ 将来像の実現に向けて推進すべきシナリオ、施策パッケージを記載しています
- ◇ シナリオ毎に、将来像実現に向けた向こう10年間の施策展開の方針を示したうえで、「シンボルプロジェクト」(重点事業：☆印)をはじめとする5年間の取組・事業を提示しています

### 1 空間像—生活空間の再編・創造—

#### 1-1 「森」の保全と活用—守り、活かす—

##### シナリオ1 森・川・里の自然再生・活用

- 災害のない豊かな森づくりの一環として、緊急防災林や、針葉樹林と広葉樹林の混交林、野生動物共生林(バッファゾーン)等の整備を進めていきます。獣害対策では、個体数管理・被害対策を進めるほか、ジビエ利用の拡大などにも努めます  
(主な事業・活動)
  - ・ 災害に強い森づくり ・ 造林事業 ・ 治山事業 ・ 鳥獣被害防止対策
- 丹波産木材の利用促進に向け、作業道の開設等原木供給体制の整備を進めるとともに、丹波産木材を使った木造住宅の普及促進を図ります。木質バイオマスの利用拡大にも取り組みます
  - ・ モデル住宅の整備 ・ 県産木材利用拡大キャンペーン
- 身近な里山(森林)の憩いの場、学びの場、暮らしの場としての活用を促進する「**アクティブ・フォレスト**」プログラムを策定します。そのもとで、住民、域外サポーター、学校、企業など多様な担い手が連携し、里山(森林)整備や森林管理、資源循環、希少生物保護、環境学習、もりびと育成等を進める仕組みづくりを進めます
  - ☆丹波の森シンボルプロジェクト (「**アクティブ・フォレスト**」プログラム)
    - ・ 丹波の里山づくり促進事業 (「木の駅プロジェクト」への参加促進等)
    - ・ 里山防災林整備 ・ 住民参加型森林整備 ・ 企業の森づくり
    - ・ 環境学習プログラム
- 豊かな川づくりにおいては、自然環境、生態系の保全に努めながら河川整備を行なうとともに、多彩な交流を育む、多様性のある水辺空間づくりを進めます
  - ・ 源流の里親水環境整備
  - ・ 関西プラスチックごみゼロ宣言 (関西広域連合)

##### シナリオ2 景観の保全—温かくて、懐かしい丹波の景観を残す—

- 丹波らしい景観を未来に残していくために、時代の変化に合わせて景観ガイドラインの見直しや景観保全に向けた空間管理の新たな仕組みの導入を進めます。また、た

め池や桜づつみ回廊、たんば三街道等の魅力的な景観の発信に取り組むとともに、もりびとの手による景観保全活動を後押ししていきます

(主な事業・取組)

- ・兵庫県緑条例による開発の規制誘導 ・兵庫県景観条例による地区指定
- ・たんば三街道の並木道整備 ・桜づつみ回廊の美観保全
- ・古民家の再生支援 ・アドプト・プログラム ・ミニガーデンの展示
- ・日本農業遺産認定 (丹波篠山市)

## 1-2 集落、まちの創生—居心地のよい「場」の創出—

### シナリオ3 集落保全の仕組み構築—未来へつなぐ集落資産—

- 集落の家屋管理や農地の集約化、里山の保全等を推進する仕組みの整備にあたりとともに、農地維持につながる地域共同活動を支援します。居住者が減少したとしても、集落資産を適切に維持・管理し、将来に備えるとともに伝統的景観の保全を図ります
- 集落資産の維持・管理にあたっては、定住人口とともに、関係人口が一定の役割を担えるよう集落運営の仕組みの刷新を呼びかけます。モデル・コミュニティでは、関係人口が電子市民として参画する仮想コミュニティの構築や新しいコミュニティ・ルールの形成などを進めます
- 局地的な集中豪雨などの発生頻度が増している状況を踏まえ、ため池改修など農業用施設の整備を計画的に進めます。また、集落の防災力向上を図るため、管理者による適切な保安全管理など減災対策に取り組めます

(主な事業)

☆次世代コミュニティ・プロジェクト (持続可能なコミュニティ・プログラム)

- ・中山間地域等直接支払交付金 ・農地のフル活用推進事業 ・ため池整備事業
- ・美しい村づくりプロジェクト ・地域でため池を守るプロジェクト

### シナリオ4 エネルギーの自立分散供給—地産地消の実現—

- エネルギー自給率 100%のコミュニティの実現に向けて、集落等小地区単位でのバイオマス等の再生可能エネルギーの導入を促進するとともに、世帯単位での自家発電への支援も進めます。また、バイオマス利用の啓発・普及や省エネルギー運動に取り組むもりびとの活動を支援していきます。

(主な事業)

☆次世代コミュニティ・プロジェクト (スマートコミュニティ・プログラム)

- ・スマートエネルギー導入支援、薪ストーブ、薪ボイラー設置支援
- ・蓄電池、エコ供給器、家庭用発電設備の普及促進

### シナリオ5 未来都市の創造

- 中心市街地の将来を展望し、まちなかに集約すべき機能、サービス等の検討を行いながら、人々のふれあい、交流の場としてのそのあり方を示します。また、テレワークや多拠点居住など、将来の働き方、暮らし方に対応した施設・拠点の整備方向を明らかにします
- 近未来における自動運転技術等の技術進歩を念頭に置きながら、公共交通の体系や利用システムのあり方を示すとともに、新技術の実証実験に取り組みます

(主な事業・活動)

☆まちの拠点創造プロジェクト

- ・まちづくり会社の活動支援
- ・大学と地域の連携事業
- ・グリーン・スローモビリティの社会実験
- ・ローカル・マースの導入促進

## 2 社会経済像

### 2-1 新しい産業、事業が生まれ続ける価値創発の風土づくり

#### シナリオ6 農の持続化とフードバリューチェーンの構築

- 農家の大半を占める兼業・小規模農家と大規模農家が協調しながら持続的に営農できる環境の整備を図るため、経営、環境、人材等の側面から農の持続可能性を追求していきます。経営面では、**スマート農業**による省力化、効率化、人材面では、経営感覚に優れた担い手の育成に加え、**半農半X**等への支援による新たな担い手の確保を推進していきます

(主な事業・活動)

・☆たんばスマート農林業特区プロジェクト

- 農林業を中心として川上の企画開発部門、川下の加工・流通、販売、外食、サービス、観光部門をつなぐ**フードバリューチェーン**を域内（及び近隣地域）で構築し、新たな商品・製品の開発にあたります。それにより、富（所得）の域内循環と農林業の収益確保を実現します。

(主な事業・活動)

☆たんばフードバレープロジェクト

#### シナリオ7 ツーリズムの新展開

- 社会潮流や個人の嗜好の変化を踏まえ、‘分散・離散’、‘小規模’、‘多様性’を特徴とする**新たなツーリズム**（マイクロ・ツーリズム、テーマ・ツーリズム、着地型観光等と呼称）を地域主体、住民主導で展開します。それにより、域内のツーリズムの幅を広げるとともに、将来のインバウンド需要も見据え、その付加価値の向上に努めます

(主な事業・活動)

・コト体験プログラム

- 食に関しては、料理だけでなく、ホスピタリティ、景観、物語、雰囲気、しつらいな

どから五感で土地の食文化、ライフスタイル、地域性を体感できるような食文化（ガストロノミー）ツーリズムの展開をめざします

（主な事業・活動）

☆食文化ツーリズムプロジェクト

- 時間や場所にとらわれない働き方の普及とともに需要拡大が見込まれるワーケーション需要等に対応し、**脱観光型、非観光型ツーリズム**（テレワーク+社会体験、ビジネス交流等）を推進します

☆たんばスタイル（たんば暮らし）プロジェクト

- 丹波ならではのアクティブ・フォレストを生かした、伐採体験や森を使った遊び、スポーツ等を行うフォレストツーリズムを推進します

### シナリオ8 製品・サービスの高付加価値化—世界市場との直結—

- フードバリューチェーンの形成による農林業やツーリズムとの連携のもと、より付加価値の高い加工食品の開発にあたります。ブランド力のある域外飲食業との連携により、農産物や加工食品の価値向上を図ります。オンリーワンの農林水産物、加工食品に関しては、世界市場への直販にも挑戦します

- 黒大豆、小豆などの特産品、加工商品、観光地などの地域資源について、更なる市場浸透を図っていきます。また、新商品開発やサービスの多角化など、戦略的な取り組みを通じて、丹波地域全体のブランド化にも取り組めます

（主な事業・活動）

☆たんばフードバレープロジェクト ☆食文化ツーリズムプロジェクト

- 日本遺産、恐竜化石等丹波固有の地域資源を活かしつつ、地域性、ストーリー性をもった商品・サービスの開発に取り組んでいきます

（主な事業・活動）

・「コト体験」プログラム ☆たんば恐竜回廊（DMO）構想推進プロジェクト

### シナリオ9 シリ丹バレー構想の推進—エコシステム創出、DX化推進—

- 産学官民が連携し、起業家ネットワークの形成やテレワーク拠点の整備、投資家・機関とのマッチング、人材バンク（メンター登録制度）の創設等を進め、だれもが起業しやすい環境（エコシステム）の創出を図ります

- IT 事業者と地域産業、農林業の融合・マッチングを図り、地域産業のDX化、MORITECによる新商品・新サービス開発を推進します

- 地域課題の解決に資するビジネス（スマート農業等）や地域資源を活かしたビジネス（恐竜DMO等）の立ち上げを促進します

- 空き家・廃校等の遊休施設や宿泊施設（農家民宿、ゲストハウス等）をコワーキングスペースやシェアオフィス、ワーケーション拠点に活用していきます

（主な事業・活動）

☆シリ丹バレープロジェクト ☆たんばスマート農林業特区プロジェクト

## 2-2 柔軟な働き方が可能な社会の形成

### シナリオ9 シリ丹バレー構想の推進—起業支援、人材活用—(続き)

- 起業志望者に対し様々な研修機会を提供し、起業家養成にあたりとともに、資金調達等の支援を行ないます。また、ネットワークの形成により、起業志望者・起業家間の交流・連携を促進します。
- 地域内のしごとに対する副業人材を内外に公募し、特定分野に優れた専門人材の調達・登用を進めます

(主な事業・活動)

☆シリ丹バレープロジェクト

☆たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト

### シナリオ10 多様なワークスタイルの創出

- 若年層等を対象に農林業、地域産業の現場での就業体験機会(有償インターンシップ等)を拡大する一方で、人手不足解消に向け組織間で人材の共有化、相互利用を促していきます
- 共有経済(シェアリング・エコノミー)の1つとして、地域限定のクラウド・ソーシングの仕組みを構築し、地域でニーズ・供給のある多種多様な小口のしごとのマッチングを促進し、副業・兼業等の推進を図ります

(主な事業・活動)

☆たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト

☆次世代コミュニティ・プロジェクト(スマートコミュニティ)

### シナリオ11 多彩な食農人材の集積促進

- 農や食、スローフードライフに関心のある層に対して、コト体験プログラムや就業体験等を通して丹波における農のある暮らしの魅力を訴求します。それにより、多様な就農への間口を広げていきます
- 他の仕事に従事しながらも、個々人のニーズに応じて、多様な農のある暮らし(半農半X)できるよう伴走型支援を実施します
- 農の多様化とともに、農、食をめぐる異能のカリスマ人材の流入を促し、食材の供給基地から新たな調理法や料理を生み出す食文化(ガストロノミー)の発信拠点への転換をめざしていきます

(主な事業・活動)

☆たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト

☆たんばフードバレープロジェクト

☆食文化ツーリズムプロジェクト

☆次世代コミュニティ・プロジェクト(スマートコミュニティ)

### 3 人間像

#### 3-1 創造的人材の育成・活用と地域文化力の向上

##### シナリオ11 多彩な食農人材の集積促進（再掲）

##### シナリオ12 もりびとの育成・発掘

- 里山づくりなどの地域活動や地域資源を活かした活性化の取組において次世代の担い手づくりを進めます。若い世代の担い手の育成にあたるほか、関係人口のなかからも積極的に担い手を発掘・登用していきます
- デジタル技術の活用による社会課題の解決に向け、広く一般からアイデア、知恵、技術を募るオープン・イノベーションの仕組みを導入し、市民イノベーターの参画を促します

（主な事業・活動）

- ・ もりびと育成事業 ・ 里山づくりの促進 ・ たんばの森大学 ・ 丹波OB大学
- ☆たんばスタイル（たんば暮らし）プロジェクト

##### シナリオ13 ソーシャル・インクルージョンの推進—全員活躍型社会の実現—

- 地域において、年齢、性別、国籍、障がいの有無等に関わりなく、意欲ある人材がその能力や経験を活かして、主体的に活動に参画する仕組みを整備し、地域力（問題解決能力）の向上を図ります

##### シナリオ14 創造都市・創造農村の形成—文化の発信力強化—

- まちなかエリア等において古民家等のリノベーションにより文化創造活動の拠点形成を図るとともに、クリエイター相互の交流を促進することで、地域に根ざしつつも、時代に相応しい新たな文化、ライフスタイルを発信
- 集落等において伝統文化、民俗芸能、祭礼の継承を図るとともに、コト体験ツーリズムやインターンシップ等を通じて集落文化を体感できる機会を提供し、その文化的価値を内外に広く発信します。

（主な事業・活動）

- ☆まちなか拠点創造プロジェクト
- ☆たんばスタイル（たんば暮らし）プロジェクト
- ☆森のシンボルプロジェクト（集落文化体感プログラム）
- ☆次世代コミュニティ・プロジェクト（持続可能なコミュニティ・プログラム）

##### シナリオ15 グローバル教育、国際理解教育の実践—世界との連携—

- 丹波の森大学のオープン化、グローバル化を推進します。丹波ならではの講座（森づくり、実践農学、古民家再生等）をオンラインで海外からも受講可能にするるとともに、講師陣に海外の専門家、研究者を加え、少子・高齢化等世界共通の地域課題の解決に向けたアクティブ・ラーニングを実践します
- 地域社会でも外国人コミュニティと連携して、多文化共生講座、国際理解教育プログ



ラムを推進し、相互理解を促進します

(主な事業・活動)

・たんばの森大学 ・丹波OB大学 他

### シナリオ16 キッズ・ファーストプログラムの展開

- 子どもたちが自然のなかでの生き物とのふれあいや遊びを通して、感性を磨き、生きる力やふるさと意識を育むことのできる場や機会を設けます
- 子どもたちが地域の歴史文化、環境、農林業、地場産業、伝統芸能などを現場で自ら学ぶことができるよう様々な「こどもコト体験プログラム」を地域全体で開発、実践していきます

(主な事業・活動)

☆たんば子ども王国プロジェクト 縄文の森塾 他

## 3-2 人と人のつながり拡大と新たなコミュニティ形成

### シナリオ17 関係人口の拡大+移住・環流の促進

- 担い手(当事者)として集落運営、森づくりに関わる関係人口の拡大に向け、ビジターをゲストからホストへと誘う仕掛けづくりを進めます
- 関係人口の滞在、二地域居住、移住を促すため、生活に必要なモノ・サービスをシェアできる仕組み(シェアハウス、カーシェア等)を整備するとともに、新たな生業を興す人への起業支援や半農半Xを志向する人へのしごとのマッチングを強化します

(主な事業・活動)

☆たんばスタイル(たんば暮らし)プロジェクト

### シナリオ18 次世代コミュニティの形成

- 最先端のデジタル技術を活用して、高齢者の介護や子どもの見守りの新たなシステム構築や避難誘導情報のリアルタイムでの発信・共有などを進め、人と技術の力で**安全安心コミュニティ**の形成を推進します
- デマンド型タクシーなどに**生活交通マース(MaaS)**のシステム導入を促し、高齢者等の移動の円滑化を図ります
- 地域、地区単位で、空間や家屋、車などのモノや人(スキル・サービス)等の資源を共有し、相互利用を図り、生活の質の向上を実現する**共有経済(シェアリングエコノミー)**の仕組み構築を進めます

(主な事業・活動)

☆まちなか拠点創造プロジェクト

☆次世代コミュニティ・プロジェクト(持続可能なコミュニティ・プログラム)

☆次世代コミュニティ・プロジェクト(スマートコミュニティ・プログラム)

## VII 新ビジョンの推進に向けて

◇ 新ビジョンで示した将来像やシナリオの実現に向けては、関係主体間で参画と協働の意義を共有し、実効性ある推進体制・枠組みを築くことが重要になります

### 1 参画と協働の深化ー共感から共創へー

- 地域ビジョンの基調である『参画と協働』の理念（＝「みんなで丹波の森」）は、この20年の間に様々な分野、取組に浸透してきました。市民との協働や官民連携は事業推進にあたって必須条件と化しつつあります
- しかし、参画と協働が拡大するに伴い、理念よりもむしろ事業の効率化や事業委託といった手続きの側面が強調されるようになりました
- そこで、新ビジョンの推進にあたっては、参画と協働の本来的な意義を改めて説き、その深化を図るため、次のキーワードを掲げます

『共感・共進化・共創』（「ともに感じ、ともに成長し、ともに創る」）

- 『共感・共進化・共創』に込められた意味は次のとおりです
  - ・ 納得と『共感』：各主体が納得し、共感（当事者意識）を抱いて主体的、積極的に取り組むことを基本とするー主体性の発露としての参画・協働
  - ・ 学習と『共進化』：各主体が学習活動を通じ、共に成長する、自らの能力を開発するー成長プロセスとしての参画・協働
  - ・ 価値の『共創』：次世代社会に向けた新たな価値創造をゴールとするーチャレンジ（目標への挑戦）としての参画・協働
- シンボルプロジェクト等の推進にあたっては、『共感・共進化・共創』の視点からも、事業の評価・点検を行なっていきます

### 2 推進体制・枠組み

- 丹波では当初ビジョン策定後の20年の間に、各分野で新たな担い手が現われ、様々な団体が設立されてきました、また、大学と地域の連携も進み、丹波で活動する域外の人（関係人口）の数も拡大しつつあります。
- こうした現状を踏まえると、各分野で活躍する内外の組織や人材をゆるやかにつなぐ形で新ビジョンの推進組織（「プラットフォーム TAMBA」（仮称））を結成することが適切と考えます。プラットフォームは、域内の産官学民の力を結集するとともに、関係人口等域外の人々との結びつきを強化する役割を担います。また、様々な人が地域づくりに参画しやすいように地域の仮想コミュニティ化を推進します

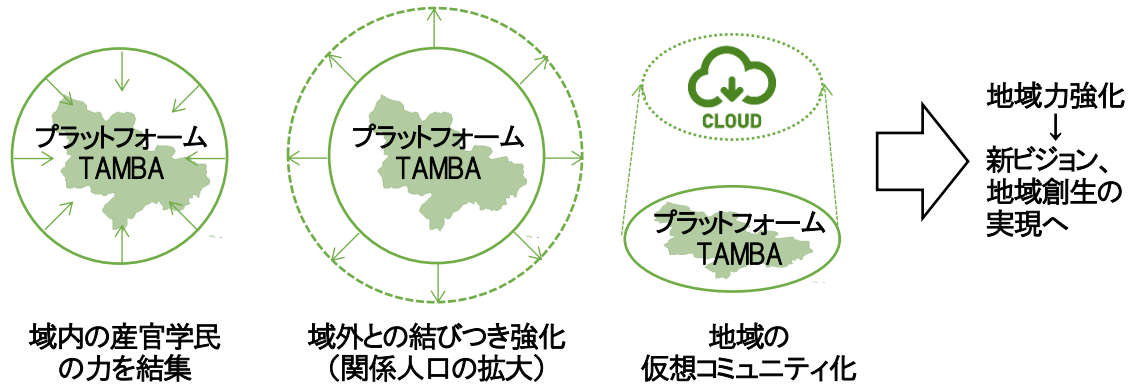


図 地域力強化に向けたプラットフォームの役割

- プラットフォームは、各分野のネットワークの代表（市民（もりびと）、地域団体、産業界等）と若者代表、学識者、行政で構成され、これまで地域ビジョン委員会が担ってきたビジョンのフォローアップ（点検、評価・検証）やコーディネートの機能を担います。また、ビジョンの実実施計画の役割を果たす地域創生戦略（計画期間5年間）の策定・推進機関ともなります。
- プラットフォームでは、シンボルプロジェクト毎にその推進を図る「プロジェクトチーム」を結成します。チーム結成にあたっては、プロジェクト推進上の課題解決に貢献できる人材を広く募ります。プロジェクトチーム等に多彩な人材を呼び込めるよう、関係人口等が活動しやすい環境づくりを進めます。なお、プロジェクトチームのメンバーの代表も、プラットフォームに参画します
- また、次代を担う若者による「たんばユースチーム」（仮称）を結成します。ユースチームは、居住者、丹波で働く、活動する人、出身者らで構成されます。ユースチームは、将来に向けた提案をはじめ、シンボルプロジェクト等事業の推進に資するアイデアの提供、情報発信、ネットワーク形成など様々な役割を担います。ユースチームのメンバーには、プラットフォームやプロジェクトチームの一員としての活動も期待されています。

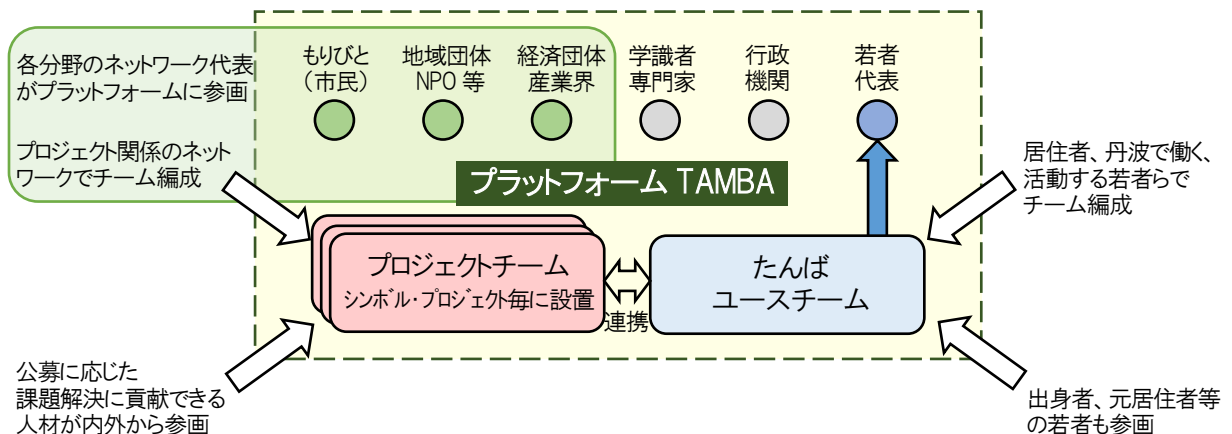


図 推進体制のイメージ